交通評論

除染のあとさき

土器屋　由紀子

福島県飯舘村・佐須の滑地区ではいよいよ行政による正規の除染が始まった。本来は昨年の3月に完了するはずが大幅に遅れていたものである。

私の属する「認定NPO法人ふくしま再生の会」（代表・田尾陽一、以下「再生の会」）が拠点としている菅野宗夫さんの住宅周りと裏山でも9月半ばから作業が始まった。

週末に行ったところ、裏山の赤土が露出しているのがまず目に入った。家屋から20㍍の間の草木がすべて取り除かれ、黒いバッグに入れられており、見慣れた農家のたたずまいがまるで工事現場の様相を呈していた。

作業が進むと細かいところが気になる。裏の山際の「行者にんにく」の一叢（ひとむら）は刈り取られてしまったが、来年は芽を出すだろうか、91歳の次男（つぎお）さんが手入れをしていた前庭はさっぱりしてしまい、千恵子さんが孫と植えたアスパラガスは消えてしまっただろうか？　赤紫の大輪の花をつける牡丹は？　1カ月ぶりに菅野家を訪ねた私には、見るものすべて違和感があり、失われた美しさを嘆きたくなった。

しかし、考えてみると村民である菅野家の人たちは3年半前に既にすべてを失っているのである。たかが3年間、月に1回程度のお付き合いをしている外部の人間の感傷など、かえって迷惑かもしれないとも感じた。

測定用の試料採取をお願いしている大気粉塵のフィルターは「除染が始まってから着色が目立つようになったので、役場のサンプルとの比較に興味がありますね」という宗夫さんの言葉に、決してめげない村民の強さを感じて励まされた。

この3年の間、欠かさずに1～2週間ごとの測定値があるのは、農作業や忙しい活動の合間に手間のかかるフィルター交換を引き受けている宗夫さんのおかげである。

村の2カ所で同時採取されたフィルターは国立環境研究所で精密測定が行われ、大気濃度に換算されるが、その精度は、カウンターを読んで記録し、ポリの手袋とピンセットを使ってフィルターを交換する宗夫さんの地味な、しかし気の抜けない作業にかかっていると言っても過言ではない。

10月15日に東大農学部で「再生の会」の総会と報告会が行われ、飯舘村からも宗夫さんはじめ数名が出席し、成果が報告された。ハウス栽培で育てたレタスやワサビ菜、イチゴやサルナシのジャムなどが（環境基準以下の測定値を添えて）展示され、２０１３年の火災前に撮影された山津見神社の天井絵の写真、医療班の報告、など多彩で活気のある集まりであったが、東大農学部の溝口勝教授が、講演の中で「除染後の農業をどう考えるか」というスライドを示した時に熱気が増した。

「この災害を逆手に取って新しい日本型の農業を作り出すチャンスにする。戻る人が少ないのなら何らかの応援する仕組みを作る。例えば新しい農業教育コースを高校・大学に作り全国から推薦入学させる」と前向きなものである。

飯舘で実際に行われた除染後の水田を自ら調査し、はぎ取られて山砂で覆土された表層が15㌢にも及び、黒い袋の山があちこちにあるという、農家にとって厳しくつらい現実を見ながら、それでも「どんなことがあっても帰って村を復興させる」という宗夫さんたちの熱気が乗り移ったような発言であった。

今後、多難な現実に向かうことになると思われるが、行政も、ボランティアも真に有効な手伝いをすることがいま求められているのではないだろうか。

（江戸川大学名誉教授）